

## 二〇一五年度 東北大学前期試験 国語解答・解説及び配点予想

※ここでは国語を100点満点で考えています。学部学科によって満点が異なることも考えられますが、配点のポイントは共通であると考えられます。

### 一 【現代文】

#### 【解答例】

問一 1 軽快 2 紛 3 脅 4 洞窟 5 残酷

問二 人間には困難な、完璧な芸術を翅で表現するあり方。(二十四字)

問三 蝶が、隠れる時は翅の裏の地味な色を見せる一方で、敵を驚かす時は表の鮮やかな色を見せること。(四十五字)

問四 蝶が翅の裏の地味な面と表の鮮やかな色の面を使い分けて逃げようとするほど、人間がその完璧な芸術性にひかれて追ってくる状況。(六十字)

問五 美しい形象をつくり出す自然の傾向から、蝶が完璧な芸術としての翅を持つものに対して、人間はその美を模倣しようとして、不完全な絵を描くことしかできないから。(七十五字)

#### 【配点予想】(三十点)

問一 一点×5 解答通り

問二 三点 ニュアンスが出ていれば可。

※末尾の句点を脱した場合、一点減。(以下同じ)

問三 六点 ポイント以下の通り

・「隠蔽」と「顕示」の両面について触れているか。(二点)

・両者の内容を過不足なく説明しているか。(四点)

問四 八点 ポイント以下の通り

- ・ 蝶と人間の関係について触れているか。 (二点)
- ・ 蝶の翅の機能について説明しているか。 (三点)
- ・ 人間の行動について説明しているか。 (三点)

問五 八点 ポイント以下の通り

- ・ 人間と蝶の双方に触れているか。 (二点)
  - ・ 両者の関係の内容を過不足なく説明しているか。 (六点)
- ※誤字・脱字・句読点のミスや、文法的な誤りなどはそれぞれ減点。

### 【解説(総合)】

鶴岡真弓「装飾する魂 日本の文様芸術」からの出題。美を生み出そうとする自然の傾向から生まれた完璧な芸術的存在である「蝶」との対比において、芸術を創造しようとする人間の存在について述べる。本文の長さはやや短くなったが、設問数、難易度には大きな変化はない。対比構造を説明させる問題が多いので、構造を整理して字数制限内で過不足なく論述することが求められる。

### 【解説(設問1と)】

問一 漢字問題。標準的なものである。「洞窟」の「窟」は追加常用漢字で、昨年の「曖昧」に引き続いての出題となる。

問二 蝶のどのようなあり方が「人間の嫉妬」の対象になったのかを問われている。本文末尾近くに「蝶の翅の完璧な芸術への、押さえがたいジェラシーが」とある。

問三 「隠蔽」と「顕示」の使い分けの説明。直前の文脈を整理すれば出る。

問四 傍線部があらわす「状況」を「蝶の翅の機能」に着目しつつ答える問題。「蝶の翅の機能」は問三の内容。連鎖の問いである。

問五 「著者は」の指定から全体の主旨を答える問いとわかる。ここまでの対比構造を中心にまとめる。

## 二【現代文】

### 【解答例】

問一 小説家のほめ言葉がただのお世辞だと見抜いたから。(二十四字)

問二 すべてが空白の本を出すこと。(十四字)

問三 何かを創造するよりも、白い本という表現により、自分を含めたすべてを無化したいという考え。(四十四字)

問四 本との出会いにより、創造や表現に向けて突き動かされる気持。(二十九字)

問五 自分も含めた既存の作家の創作への批判に打ちのめされるとともに、すべて空白の本という表現を通して徹底的な無化をたくらむ相手のかたくなさにも触れたから。(七十四字)

### 【配点予想】(三十点)

問一 三点

※ニュアンスが出ていれば可。

※末尾の句点を脱した場合、一点減(以下同じ)

問二 三点

※ニュアンスが出ていれば可。

問三 八点 ポイント以下の通り

- ・「著者」が創造ではなく表現をめざすことを説明しているか。(四点)
- ・「白い本」の表現は、自分の存在も含めた徹底的な無化を目指すものだということを説明しているか。(四点)

問四 六点 ポイント以下の通り

- ・本との出会いを通した気持であることを説明しているか。(二点)
- ・「何かを書きたい」(創造)「何も書かない」(表現)を過不足なく説明しているか。(四点)

問五 十点

- ・「感動」「たじろぎ」の両者の理由について触れているか。(二点)
- ・両者の理由を過不足なく説明しているか。(八点)

※誤字・脱字・句読点のミスや、文法的な誤りなどはそれぞれ減点。

### 【解説(総合)】

開高健「揺れた」からの出題。昨年は随筆が出題されたが、本年度は小説に戻った。本文の量、設問数は例年通りで内容的にも平易。ただし設問の字数設定が厳しく、要素を過不足なく説明するには、ある程度以上の答案作成技術が必須。そのため一つ一つの設問を丁寧にみて、求められている条件に沿って答案をまとめる必要があることになる。

### 【解説(設問ごと)】

問一 傍線部の理由を問う問題。直前の文脈をまとめる。字数的に見て、「著者」の意図まで説明する必要はないものと思われる。

問二 「著者」の行為を説明する問題。リード文で出る。

問三 設問の指定に注意。「この会」が終わったら「さっさと消えてなくなります」という箇所に現れた「著者の考え」を説明するという条件である。したがって、末尾の部分の「徹底的な無化をたくらむ」を説明する必要があると考えられる。

問四 指示内容を答える問題。前後の文脈で出る。並列に注意。

問五 「感動しつつ、たじろいだ」理由を問われている。並列なので両者の理由を過不足なく説明すること。

## 三【古文】

## 【解答例】

問一 ア しばらくして日が暮れた

イ なんとなく寒々とした心地がした

問二 月夜は十五夜の明日もあると思い、今夜は見なくてもよいと思うのは、浅はかな考えだ、の意。

問三 明日があると思う怠け心もなく出ている清らかで美しい月を、私も機を逃さずに眺めている、の意。(四十五字)

問四 月見する千本がうてなの上で歌を吟じた声。(二十字)

問五 月見をする約束を守って早くからうてなに登り、誘った当人が来ないのに、一人で歌を吟じながら月見をして、一晚中過ごしたこと。(六十字)

## 【配点予想】(二十点)

問一 二点×2

ア ・「とばかりありて」 (一点)

・「日も暮れぬ」 (一点)

イ ・「そぞろ寒き」 (一点)

・「心地しつ」 (一点)

問二 四点

・「明日ありと」について、どのようなことがあるのかを指摘している。(二点)

・「あさき」に非難の意がこめられていることを指摘している。(二点)

問三 四点

・「明日ありと」について、どのようなことがあるのかを指摘している。(二点)

・月を詠みつつ、詠み手自身のことをも表現していることを指摘している。(二点)

問四 二点

- ・千本が吟じたことを指摘している。(一点)
- ・千本が「うてな」の上にいたことを指摘している。(一点)

問五 六点

- ・早くから「うてな」に登っていたことを指摘している。(二点)
- ・一人で歌を吟じながら月見をしていたことを指摘している。(二点)
- ・一晩中「うてな」にいたことを指摘している。(二点)

【解説】

問一 ア 「とばかり」は「しばらく、少しの間」の意。「ぬ」は完了の助動詞。

イ 「そぞろ」は重要語。「つ」は完了の助動詞。

問二 直前の会話文から、俳諧師は、千本が月見の招きに応じずどこかへ行ってしまったと考えており、「あさき」は千本の考えが浅いと非難しているということを説明する。

問三 「心のおこたり」が無いのは、月と詠み手の両方であることを説明する。なお、この歌を、傍線部(1)の句を踏まえたものとしてはいけない。本文の最後に「闇に合せしこと」とある。「闇合(暗合)」とは「偶然に一致する」という意味。

問四 本文の末尾から四行前の「よべはとくよりここにのぼりて、月見て一夜あかしたり」と、三行前の「かくばかり高きうてなの上にて歌吟じければ、」から簡単に分かる。

問五 本文から、千本の言動を丁寧に読み取る。「性急」は早くから「うてな」に登っていたこと、「月にめでて」は月を見ながら歌を吟じたこと、「心なかりし」は一晩中「うてな」にいたことを指摘すればよい。

## 四【漢文】

## 【解答例】

問一 1 あによく

2 ついに

問二 3 そうよりろうにいたるまで

4 これをちにほる

5 えるとえざるとをろんずるなく

問三 a 若いころは鍛冶屋を生業としていた。

b 一日中力を尽くしても

問四 富貴への欲に取り付かれ、生業を捨てて地面を掘って金を掘り、結局得られなかった点。(四十字)

問五 世の人々が富を得ようとして権力者にへつらうさまは、富を得ようと地を掘った羅麻の行いよりも卑しいことだと思ったから。(五十七字)

## 【配点予想】(二十点)

問一 一点×2 解答通り

問二 一点×3 解答通り

問三 二点×2 ニュアンスが出ていれば可。

問四 五点 ポイント以下の通り。

・哀れむべき理由 Ⅱ「富貴の欲に溺れる」が説明されているか。

- ・笑うべき理由 || 「計の拙」が説明されているか。
- ・「羅麻」の努力が徒勞であったことが説明されているか。

問五 六点 ポイント以下の通り

- ・「羅麻」の愚かしさが説明されているか。
  - ・「世人」のありさまが説明されているか。
  - ・後者がより「卑汚」であることが説明されているか。
- ※誤字・脱字・句読点のミスや、文法的な誤りなどはそれぞれ減点。

### 【解説(総合)】

向瓊「羅麻伝」からの出題。おそらくは架空の、無名の人物を題材にした寓話的な文章。本文は比較的長めだが、語彙・文法的に特に難解なところはなく、論旨が読み取りやすい。その中から基本的な句法、語彙を問うことを通して、全体の趣旨を説明させる問題。東北大の典型問題とっていい、バランスの取れた良問である。

### 【解説(設問ごと)】

問一 語句の読み。(1)の「豈能」という組み合わせを問うのは珍しい。

問二 書き下し。(1)「自」は「より」という前置詞的用法。(4)直前に類似の構文がある。(5)「与」の並列用法。「A与B」で「AとBと」と読む。

問三 口語訳。(a)「少」は漢文では「年が若い」の意味。「以A為B」はイディオムのなもの。「AをBとする」が基本の意味で、ここから「AをBだと思ふ」「AをB(という地位に)任命する」「AによってBをする」などの意味になる。この場合は「冶鑄」を「業(仕事)」とした、の意味。

問四 設問の指定にあわせて前の文脈をとれば出る。

問五 これも直前の文脈をとる。注釈を見落とさないこと。



## 【通釈】

三江に羅麻（あばた面）という者がいた。その名は何とこのか知らない。里の人々は、その顔にあばたがあるので「羅麻」と呼んでいた。（彼は）街の東の門のところにおいて、若いころは鍛冶屋を生業としていた。（しかし）成長するに及んで、金を掘り当てて金持ちになった者がいると聞き、嘆いて言った。「鍛冶屋の仕事は、賤しい上に疲れるもので、一日中力を尽くしても、手に入るのは百錢ぼちだ。どうして（こんなことをして）大金持ちになって故郷に錦を飾ることができようか」と。そこで仕事を辞め、毎日金を掘ることに一生懸命になった。しかしながら、壮年から老年に至るまで、とうとう一かけらの金も得ずに死んでしまった。（それを）聞いた人で憐れみ笑わないものはいなかった。笑うのはなぜかといえば、彼の考えがまずかったからであり、哀れむのはなぜかといえば、彼が欲に溺れたからである。ああ、金や権力のバランスは天が司り、人が支配するものである。麻は（富を）天に求めず、また人にも求めることもせず、ただひたすら地面を掘った。彼が（欲に）溺れたことは哀れむべきであり、彼（の計画）がまずかったことは笑うべきである。

しかしながら私が思うに、世の羅麻を笑い羅麻を哀れむ人々も、羅麻とたいして違うものではない。（彼らが）利益を求めて騒がしく往来するさまは、まずい計画で欲に溺れることではないのだろうか。それなのにただ羅麻だけを笑う者にして哀れむというのは、ひどい不公平ではないのか。しかも（羅麻のように）富を地面に求めるとするのは、ただ手を振り上げる労力にすぎない。金を得ればプラスになるし、得られなくてもマイナスにはならない。しかしながら利益を人から得ようとするならば、相手の前で立ちすくんだり言いよんだり、必死でこびへつらったりすることを絶対避けることはできない。（そうであれば金を）得られようと得られまいと、卑屈で薄汚い極みである。広く天下の（こうした）ありさまを見れば、悲しみを我慢することができようか。